

JR 筑肥線複線化用地内遺跡群

JR 筑肥線複線化に伴う文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第67集

2000

前原市教育委員会

JR筑肥線複線化用地内遺跡群

JR 筑肥線複線化に伴う文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第 6 7 集

序

前原市は、古代より、北部九州における大陸文化の門戸として、わが国の歴史を学ぶ上で、数々の重要な足跡を残して栄えた地域であります。古くは江戸時代天明年間、青柳種信の『柳園古器略考』によって紹介された三雲南小路遺跡・井原鎗溝遺跡などの弥生時代の王墓をはじめとして、弥生時代の多数の木製品を出土し、当時の庶民の生活を浮き彫りにする上鑑子遺跡、日本最大の径を誇る内行花文鏡など計39点もの青銅鏡を出土した謎多き平原遺跡、大陸の埋葬方式をとり入れた志登支石墓群、7世紀代に築城された古代山城の雷山神籠石、吉備真備が専当官となって天平勝宝8年(756)から神護景雲2年(768)まで約12年の歳月を要して築城された古代山城の怡土城、その怡土城を再利用して築城された中世山城の高祖城など、周知の遺跡はいうまでもなく、現在でも市内には数多くの大切な文化財が眠っています。

J R筑肥線の沿線地区も、その例にもれず、今回の発掘調査によって縄文時代から人々が確実に生活を営んでいたことが判明し、また、糸島平野における古代低地利用について解明するための情報及び資料の蓄積がなされたということで、非常に意義のある調査となったようです。本書が、当該地域の学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査を行うにあたりましては、各方面から御指導、御協力をたまわりました。とくに九州旅客鉄道株式会社からは掘削のための重機、オペレーター、見張り人など派遣していただきました。また、福岡市教育委員会からはJ R筑肥線複線化用地内およびその周辺の発掘調査に関する情報など提供していただきました。関係各位の御理解、御助力に厚くお礼申し上げます。

今後とも、文化財保護活動に格別の御配慮、御協力をたまわりますようよろしくお願いいたします。

平成12年2月29日

前原市教育委員会

教育長 坂本 勝喜

例 言

1. 本書は J R 筑肥線複線化に伴い平成 8 年から平成10年度に実施した J R 筑肥線複線化用地内遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は九州旅客鉄道株式会社の J R 筑肥線複線化に伴い、前原市が受託事業として実施した。
3. 本書に掲載した平板測量図および遺構実測図の作成は瓜生秀文が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は岡部裕俊の協力を得て瓜生が行った。
5. 本書に掲載した図面の製図は瓜生が行った。
6. 本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は瓜生が行ったが、平成 8 年度の遺跡全景写真の撮影は(有)空中写真企画によるものである。
7. 本書で示した方位は磁北である。
8. 各調査区の名称は調査順番に基づき最初を 1-A とし、○ (数字) - ○ (A ~ Z) の組み合わせで表示している。
9. 自然科学分析は(株)古環境研究所に委託した。
10. 本書の編集は瓜生が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
3. 遺跡の位置と環境	3
II. 発掘調査の記録	5
1. 平成8年度発掘調査	5
1) はじめに	5
2) 調査内容	5
2. 平成9年度発掘調査	13
1) はじめに	13
2) 調査内容	13
3. 平成10年度発掘調査	31
1) はじめに	31
2) 調査内容	31
III. 自然科学分析調査報告書	35
1. 平成8年度自然科学分析	37
(1) プラント・オパール分析（平成8年度発掘調査区の試料）	37
2. 平成9年度自然科学分析	47
(1) プラント・オパール分析（平成9年度発掘調査区の試料）	47
3. 平成10年度自然科学分析	59
(1) プラント・オパール分析（平成10年度発掘調査区の試料）	59
(2) 花粉分析（平成9年度発掘調査区の試料）	75
(3) 種実同定（平成9年度発掘調査区の試料）	85
(4) 樹種同定（平成9年度発掘調査区の試料）	91
IV. 小 結	95
1. 調査区地形概要	95
2. 縄文～弥生時代の遺構	95
3. 古墳時代の遺構	96
4. 奈良時代～中世の遺構	96

図版目次

平成8年度発掘調査

- | | |
|--------|-------------------------|
| 図版1-a | 1 調査区全景（東から） |
| - b | 1 調査区土層（東から） |
| 図版2-a | 1 調査区土層（西から） |
| - b | 2 調査区全景（西から） |
| 図版3-a | 3 調査区全景（南から） |
| - b | 3-A 調査区全景（南から） |
| 図版4-a | 3-A 調査区奈良時代遺構全景（東から） |
| - b | 3-A 調査区奈良時代遺構近景（東から） |
| 図版5-a | 3-A 調査区土層（東から） |
| - b | 3-A 調査区条里遺構土層（南から） |
| 図版6-a | 3-A 調査区古墳時代遺構全景（東から） |
| - b | 3-A 調査区古墳時代遺構近景（東から） |
| 図版7-a | 3-B 調査区全景（南から） |
| - b | 3-B 調査区奈良時代遺構近景（西から） |
| 図版8-a | 3-B 調査区土層（東から） |
| - b | 3-B 調査区弥生時代土器群出土状況（西から） |
| 図版9-a | 3-C 調査区全景（南から） |
| - b | 3-C 調査区全景（東から） |
| 図版10-a | 3-C 調査区奈良時代遺構近景（東から） |
| - b | 3-C 調査区土層（西から） |
| 図版11-a | 3-D 調査区全景（南から） |
| - b | 3-D 調査区全景（西から） |
| 図版12-a | 3-A 調査区出土遺物 |
| - b | 3-B 調査区出土遺物 |

平成9年度発掘調査

- | | |
|--------|-----------------|
| 図版13-a | 1-A 調査区全景（北西から） |
| - b | 1-A 調査区近景（西から） |
| 図版14-a | 1-B 調査区全景（北東から） |
| - b | 1-B 調査区全景（東から） |
| 図版15-a | 1-C 調査区全景（東から） |
| - b | 1-C 調査区近景（東から） |

図版16－ a	1－D 調査区東部全景（北西から）
－ b	1－D 調査区東部全景（北から）
－ c	1－D 調査区西部全景（北から）
図版17－ a	1－D 調査区東部弥生時代遺構近景（西から）
－ b	1－D 調査区東部弥生時代水田近景（東から）
図版18－ a	2－A 調査区全景（南から）
－ b	2－B 調査区全景（南東から）
図版19－ a	2－A 調査区近景（西から）
－ b	2－B 調査区近景（東から）
図版20－ a	3－A 調査区全景（東から）
－ b	3－A 調査区近景（西から）
図版21－ a	3－A 調査区土器出土状況（北から）
－ b	3－B 調査区土層（北から）
図版22－ a	3－C 調査区全景（北から）
－ b	3－C 調査区近景（西から）
図版23－ a	3－D 調査区全景（東から）
－ b	3－E 調査区縄文時代遺構全景（東から）
図版24－ a	3－E 調査区土層（南から）
－ b	3－G 調査区全景（東から）
図版25－ a	1－D 調査区出土遺物
－ b	3－A 調査区⑥層出土遺物
図版26	3－A 調査区⑦層出土遺物
図版27	3－A 調査区⑧層出土遺物
図版28	3－A 調査区出土木製品

平成10年度発掘調査

図版29－ a	3－F 調査区全景（西から）
－ b	3－F 調査区中世遺構全景（西から）
図版30－ a	3－F 調査区中世遺構近景（西から）
－ b	3－F 調査区古墳時代遺構近景（西から）

挿 図 目 次

第1図	J R 筑肥線複線化用地内遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)	2
第2図	糸島地方の地形略図.....	3
第3図	平成8年度調査地点 (1/50,000)	4
第4図	平成8年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)	6
第5図	3-A 調査区出土遺物実測図 (1/2)	7
第6図	3-B 調査区出土遺物実測図 (1/2)	7
第7図	平成9年度調査地点 (1/50,000)	14
第8図	平成9年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)	15
第9図	平成9年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)	16
第10図	1-D 調査区出土遺物実測図 (1/2)	19
第11図	3-E 調査区縄文時代遺構実測図 (1/30).....	23
第12図	3-A 調査区⑥層出土遺物実測図 (1/3)	24
第13図	3-A 調査区⑦層出土遺物実測図 (1/3,7のみ1/2)	26
第14図	3-A 調査区⑧層出土遺物実測図 (1/3)	28
第15図	3-A 調査区出土木製品実測図 (1/4)	29
第16図	3-F 調査区溝遺構土層実測図 (1/20)	31
第17図	平成10年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)	32

折り込み目次

1.	3 調査区奈良時代遺構実測図.....	9 ~ 10
2.	3-A 調査区条里遺構北側土層実測図及び3 調査区土層実測図.....	11 ~ 12
3.	1-C 調査区遺構実測図及び1 調査区土層実測図.....	17 ~ 18
4.	3-A 調査区南側土層実測図.....	21 ~ 22
5.	3-F 調査区遺構実測図.....	33 ~ 34

付 図

1.	1-D 調査区遺構実測図及び1-D 調査区北側土層実測図
----	------------------------------

I. はじめに

1. 調査に至る経過

昭和58年3月、筑肥線と福岡市営地下鉄の相互乗入によって、糸島地方は従来の食料基地としての一面に加えて、福岡都市圏に隣接する地域としてもその位置付けは確固となった。交通の潤化は人口の増加を促し、平成2年2月には人口5万人を超え、平成4年10月1日には市政施行するまでに至った。また平成5年3月の福岡空港乗入れにより利便性が飛躍的に向上した。その結果、沿線人口が増加し、輸送量は急増した。さらに、姪浜～筑前前原駅間については国立九州大学の移転計画をはじめとする各種沿線開発が進行中であり、今後の輸送需要の増加が確実となった。

このような背景に基づき、①快適な通勤通学の実現。②地域開発の促進。③鉄道利用の増加による交通問題や環境問題の緩和。等の目的のために筑肥線の下山門～筑前前原駅間の複線化の事業実施のための協議を九州旅客鉄道株式会社と平成8年5月から開始。平成8年8月5日に九州旅客鉄道株式会社から埋蔵文化財発掘の通知が提出された。その後、九州旅客鉄道株式会社、福岡市教育委員会、前原市教育委員会の三者で協議を重ね、平成8年12月に九州旅客鉄道株式会社と前原市教育委員会の間でJ R筑肥線複線化に伴う発掘調査の契約書・協定書を締結した。前原市教育委員会は平成8年12月に発掘調査届を提出し発掘調査を開始した。

以上、調査にいたるまでの経過について概略を記した。なお、九州旅客鉄道株式会社、福岡市教育委員会の各位には、多大なる御理解をいただき、その厚意に深く謝意を表すものである。

2. 調査組織

J R筑肥線複線化用地内遺跡群の発掘調査は平成8年12月より、平成11年2月まで実施し、その後は出土遺物の整理を行った。なお、発掘調査に伴う組織の構成は次のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
担 当	文化課	
総 括	教育長	坂本勝喜（平成8年度は樗木昭生）
	教育部長	有田種之（平成8年度は中原直国）
	文化課課長	松井 昇（平成8年度は岡本宗嗣、平成9、10年度は吉村耕治）
	文化課係長	林 覚（平成8年度は川村 博）
庶 務	文化振興係長	藤井正信（平成8～10年度は宮本洋子）
調 査	文化財主事	瓜生秀文

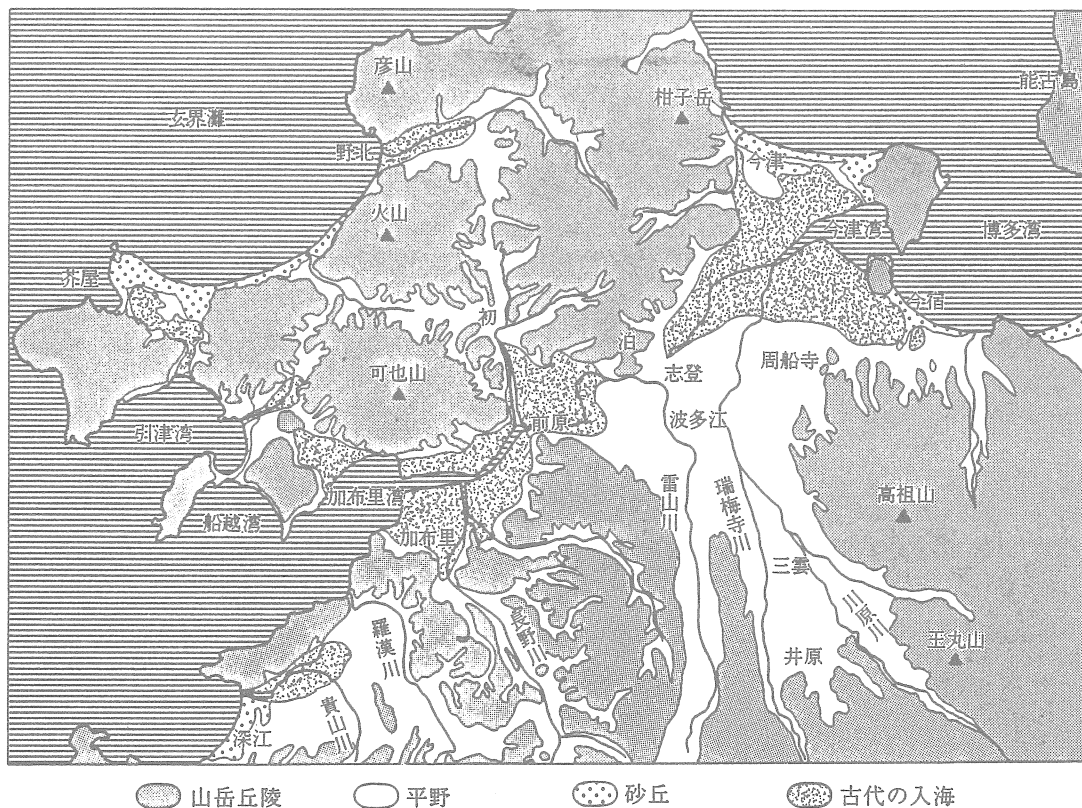
3. 遺跡の位置と環境

雷山、井原山系に源を発する雷山川、瑞梅寺川等の長期間にわたる堆積作用によって形成された糸島平野は、現標高約5 m前後から山系にむけて緩斜面を形成している糸島扇状地と、5 m未満の加布里湾と今津湾を結ぶ帯状の湿地帯である糸島低湿地帯とに大別することができる。

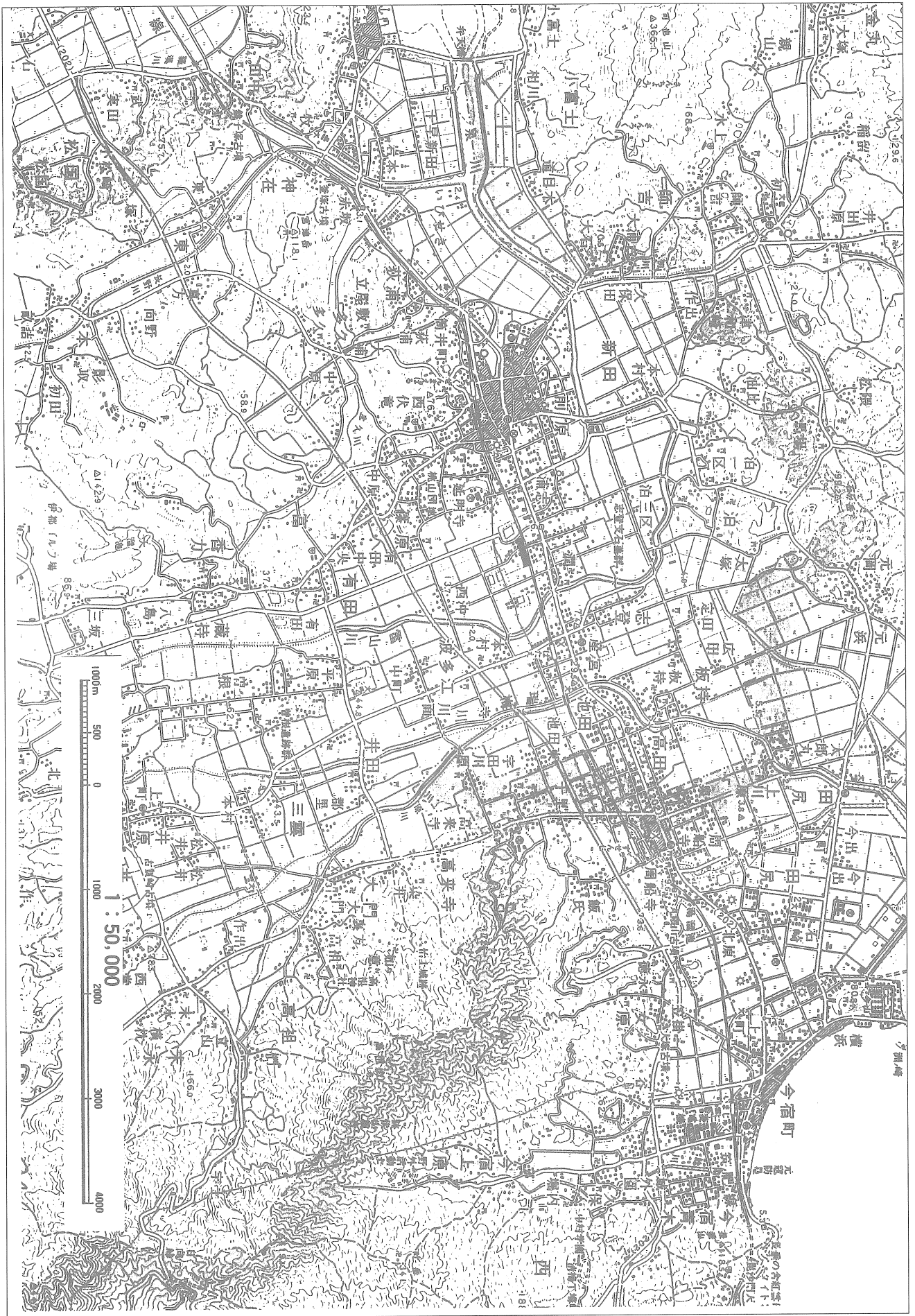
糸島低湿地帯に関して、従来この湿地帯に「糸島水道」と呼ばれる海峡が通り、古代の怡土と志麻は海によって分断していたと考えられていた。しかし、最近、縄文時代の海面変動の分析や地質・貝化石の分布調査、また遺跡の発掘調査成果をもとに検討を加えたところ、縄文時代以後では加布里と今津の両方向から大きく渦状の内海が入り込んでいたものの、泊～志登間では南北に陸地としてつながっていた可能性が高いことがわかってきている。

J R 筑肥線複線化用地内遺跡群は糸島扇状地の末端部から糸島低湿地帯にかけて位置する。当該遺跡群から瑞梅寺川を南側へ約2 km さかのぼると、古代伊都国の中心であったとされる三雲・井原遺跡群があり、この瑞梅寺川を天然の濠として集落・墳墓群が営まれている。その西側の段丘上には弥生時代から古墳時代にかけての当地の代々の首長墓を配す曾根遺跡群があり、なかでも多数の鏡を出土した平原遺跡と伊都国の関連については詳細な調査、報告が待たれる。また、前原市と福岡市とが境を接する高祖山（標高416 m）には奈良時代の古代山城が築城され、その築城に関しては大宰府の一機関である「主船司」を含めた軍事的プランのもとに実施されたと考えられている。

J R 筑肥線複線化用地内遺跡群の北側に目を移せば糸島低湿地帯のほぼ中心部には志登支石墓群を含む弥生時代～中世の集落遺跡である志登遺跡群がある。この志登遺跡群が所在することから、当該遺跡群一帯は遅くとも弥生時代には陸地化していたことがわかっている。志登遺跡群の西側には弥生終末の小銅鐸が出土した浦志遺跡群がある。



第2図 糸島地方の地形略図



第3図 平成8年度調査地点 (1/50,000)

Ⅱ．発掘調査の記録

1．平成8年度発掘調査

1) はじめに

平成8年は前原市大字浦志・潤地区の筑肥線複線化用地の発掘調査を行った。調査は3調査区にわけて実施した。以下各調査区について調査結果を報告する。

2) 調査内容

1 調査区

本調査区は平成8年度調査区で最も西に位置する。現況は水田である。調査区は南北方向に約3m、東西方向に約42mからなる長方形であり、面積は約126㎡になる。遺構は後世の水田造成のためほとんど失われていた。

遺物は陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土したが図示し得なかった。

2 調査区

本調査区は1調査区の東側約50mに位置する。現況は水田である。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約9mからなる長方形であり、面積は約18㎡になる。遺構は後世の水田造成のためほとんど失われていた。

遺物は陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土したが図示し得なかった。

3-A 調査区

本調査区は南北方向に約2m、東西方向に約35mからなる長方形であり、面積は約70㎡になる。現況は水田である。遺構は後世に水田造成が成されたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては層的に上から中世耕作層・奈良時代～平安時代にかけての耕作層・古墳時代耕作層が確認できた。奈良時代～平安時代にかけての耕作層・古墳時代耕作層においては人の足跡・畦畔が検出された。なかでも奈良時代～平安時代にかけての耕作層における畦畔とそれに伴う溝状遺構は条里制に関係する遺構と考えられ、糸島地方における条里制を考える上で貴重な資料となる。

出土遺物（第5図 図版12-a）

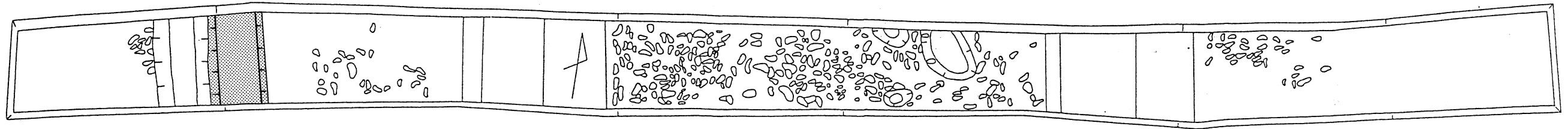
遺物は中世耕作層から陶磁器、奈良時代～平安時代にかけての耕作層から須恵器、古墳時代の耕作層から土師器の破片、木製品等が出土している。

3-B 調査区

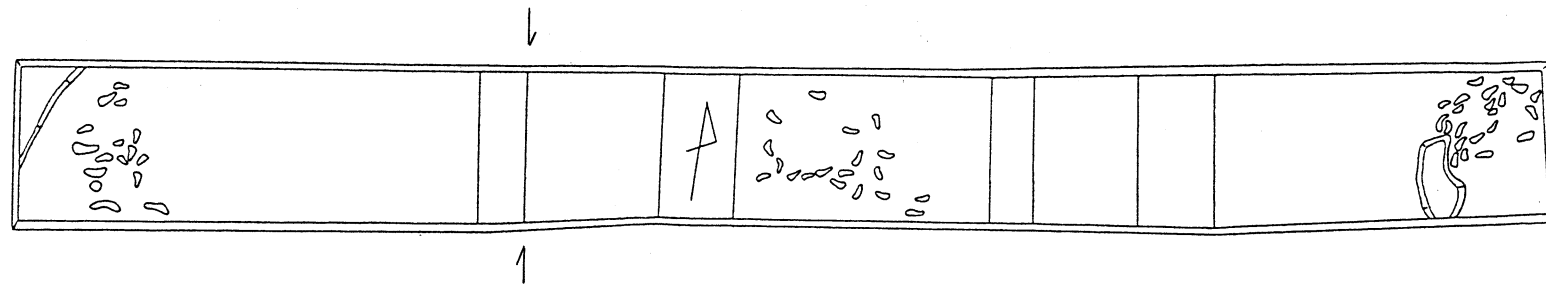
本調査区は南北方向に約2m、東西方向に約21mからなる長方形であり、面積は約42㎡になる。現況は水田である。本調査区は3-A調査区ほど遺構の残存状況は良くないが、それでも奈良～古墳時代にかけての人の足跡を検出することができた。本調査区の西端部にトレンチを設定したとこ



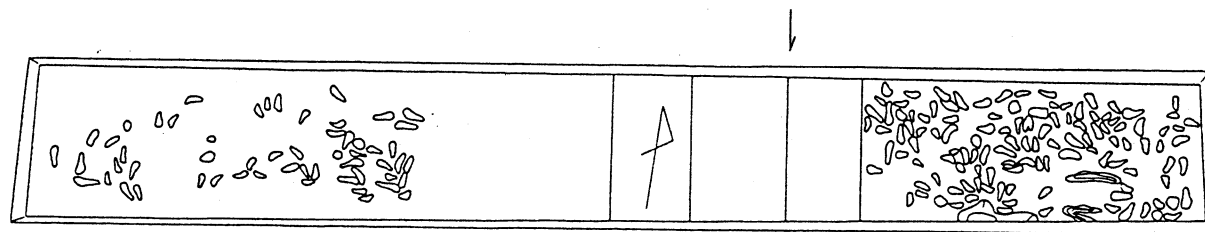
第4図 平成8年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)



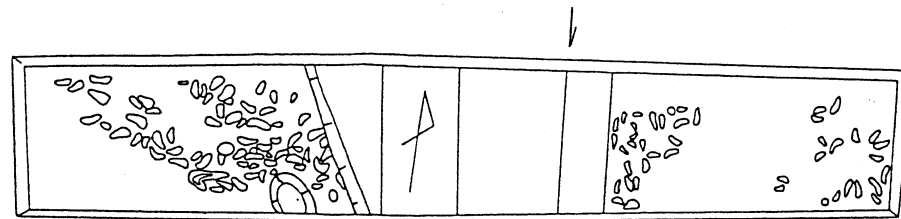
3-A 調査区



3-B 調査区



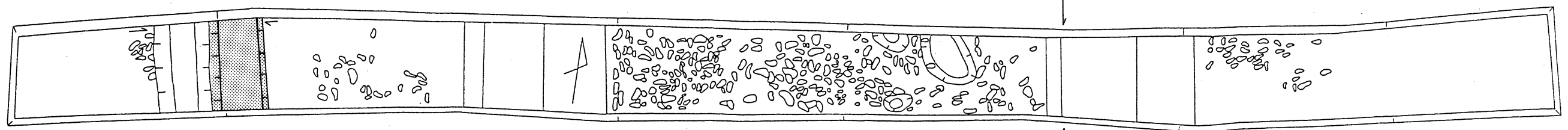
3-C 調査区



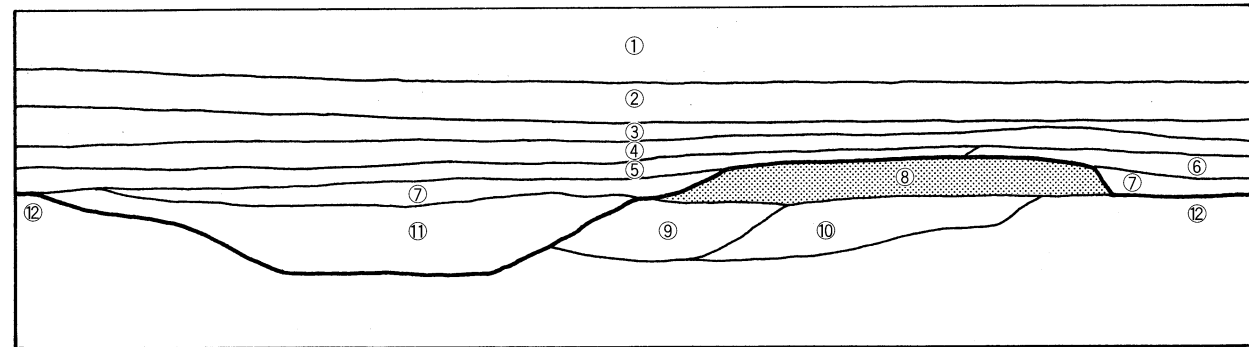
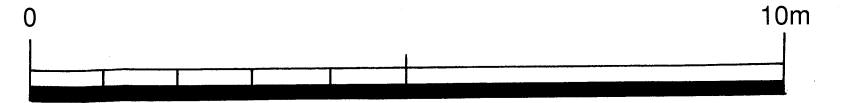
3-D 調査区



1. 3 調査区奈良時代遺構実測図 (1/100)

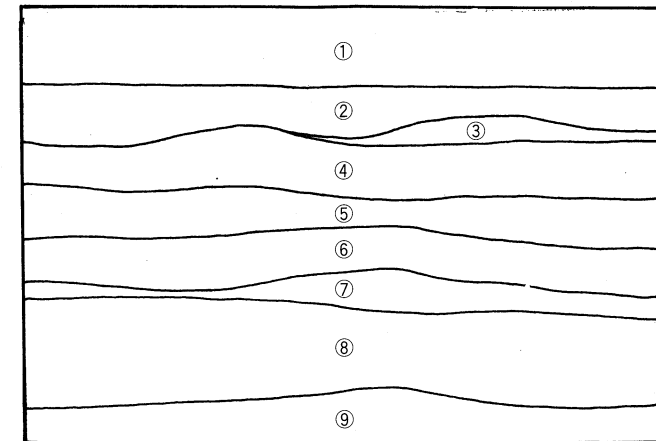


3-A 調査区



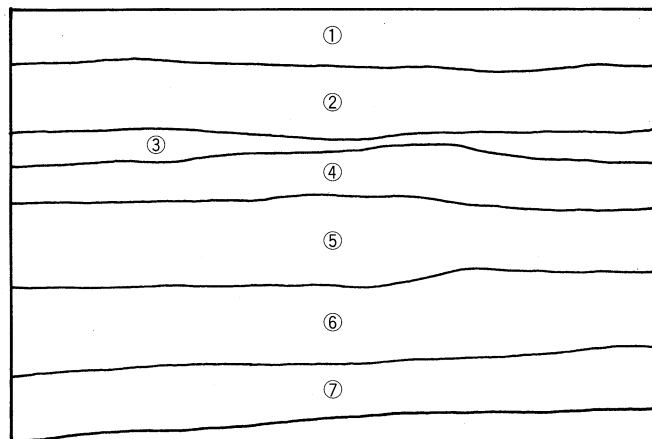
- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③砂質土(汜濫層)
- ④淡黒褐色粘質土
- ⑤暗黒灰色粘質土(中世耕作土)
- ⑥⑤より多く砂を含む(中世耕作土)
- ⑦砂質土(汜濫層)
- ⑧淡青灰色土(畦畔)
- ⑨青灰色粘質土
- ⑩⑨と同じ(⑨よりしめ固めてある)
- ⑪砂層(溝埋土)
- ⑫奈良時代足跡検出層

3-A 調査区条里遺構土層実測図 (1/20)



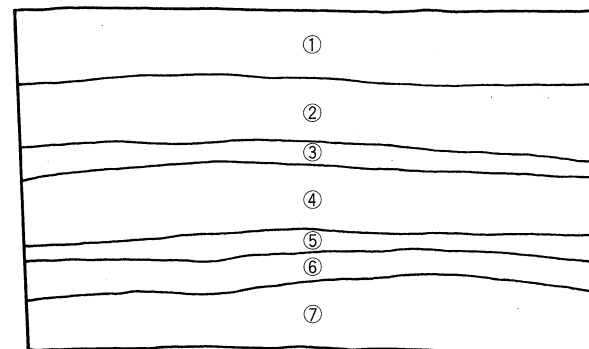
- ①現代耕作土
- ②炭黒灰色土(中世耕作土)
- ③砂質土(汜濫層)
- ④炭黒褐色粘質土(奈良時代耕作土)~足跡検出
- ⑤暗黒灰色粘質土(古墳時代耕作土)~足跡検出
- ⑥淡青灰色粘質土
- ⑦青灰色粘質土
- ⑧暗青灰色粘質土
- ⑨砂レキ層

3-A 調査区土層実測図 (1/20)



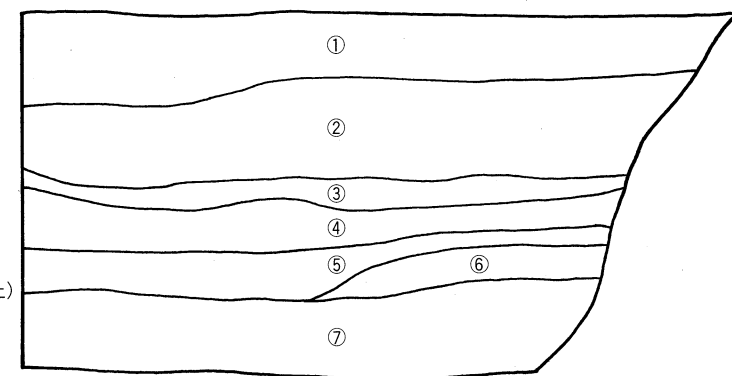
- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③淡黒褐色粘質土
- ④暗黒灰色粘質土(中世耕作土)
- ⑤淡青灰色粘質土(奈良時代耕作土)
- ⑥青灰色粘質土(古墳~弥生耕作土)
- ⑦暗青灰色粘質土

3-B 調査区土層実測図 (1/20)



- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③暗黒灰色粘質土(中世耕作土)
- ④黒褐色粘質土(奈良時代耕作土)
- ⑤明黄茶色粘質土
- ⑥淡黒灰色粘質土
- ⑦暗青灰色粘質土

3-C 調査区土層実測図 (1/20)

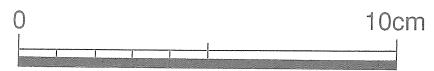
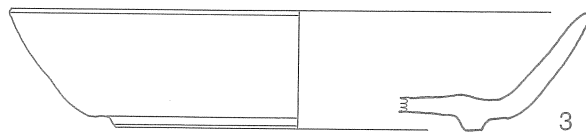
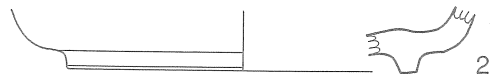
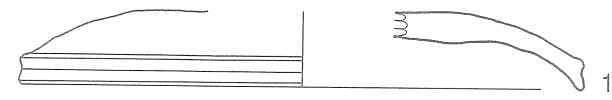


- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③砂質土
- ④暗黒灰色粘質土(中世耕作土)
- ⑤黒灰色粘質土(奈良時代耕作土)
- ⑥明黄茶色粘質土
- ⑦淡黒灰色粘質土

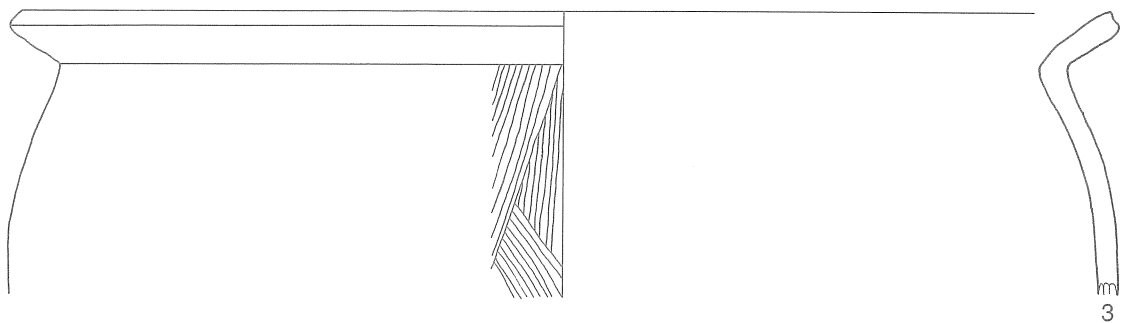
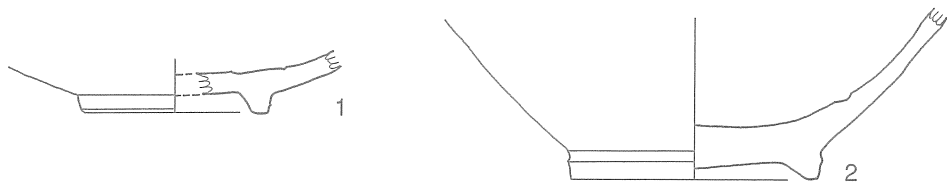
3-D 調査区土層実測図 (1/20)



2. 3-A 調査区条里遺構北側土層実測図及び3 調査区土層実測図



第5図 3-A 調査区出土遺物実測図 (1/2)



第6図 3-B 調査区出土遺物実測図 (1/2)

ろ弥生時代の土器・甕棺の破片が出土することから古墳時代の耕作層の下には弥生時代の遺構も残存していることがわかる。

出土遺物（第6図 図版12-b）

遺物は中世耕作層から陶磁器、奈良時代～平安時代にかけての耕作層から須恵器、古墳時代の耕作層から土師器、弥生時代の遺構面から弥生式土器の破片が出土している。

3-C調査区

本調査区は南北方向に約2m、東西方向に約16mからなる長方形であり、面積は約32m²になる。現況は水田である。本調査区において中世～奈良・平安時代にかけての人の足跡を検出した。なかには家畜の足跡・犁の跡と考えられるものもある。

遺物は陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土しているが図示し得なかった。

3-D調査区

本調査区は南北方向に約2m、東西方向に約12mからなる長方形であり、面積は約24m²になる。現況は水田である。本調査区において奈良～平安時代にかけての人の足跡を検出した。

遺物は陶磁器・須恵器・土師器の破片が出土しているが図示し得なかった。

出土遺物

3-A調査区出土遺物（第5図 図版12-a）

1～3は第4層（淡黒褐色粘質土）から出土した。1は須恵器の蓋である。復元口径14.8cm、残存器高2cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は内・外面ともに青灰色である。全体に丁寧なナデ、ヨコナデがほどこされている。2は須恵器の坏である。復元器台径8.4cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を若干含む。焼成は良くなく、色調は内・外面ともに淡灰色である。内・外面ともに風化が著しく調整は不明である。3は須恵器の坏である。復元口径は15.2cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は内・外面ともに青灰色である。全体に丁寧なナデ、ヨコナデがほどこされている。

3-B調査区出土遺物（第6図 図版12-b）

1、2は第4層（暗黒灰色粘質土）から出土した。3は第6層（青灰色粘質土）から出土した。1は陶磁器である。復元器台径4.2cmを測る。内・外面ともに暗緑色の釉がほどこされている。ただし、内側底部には蛇ノ目状に釉を欠く部分がある。焼成は良好である。2は陶磁器である。器台径6.4cmを測る。内・外面ともに乳白色の釉がほどこされている。焼成は良好である。3は弥生式土器の甕の口縁部である。胎土は1mm前後の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内・外面ともに赤茶色である。内面は胴部から頸部にかけて丁寧なナデがほどこされ、頸部はヨコナデがほどこされている。外面は頸部から胴部にかけてハケ目がほどこされている。

平成8年度発掘調査



a 1 調査区全景 (東から)



b 1 調査区土層 (東から)

図版 2



a 1 調査区土層 (西から)



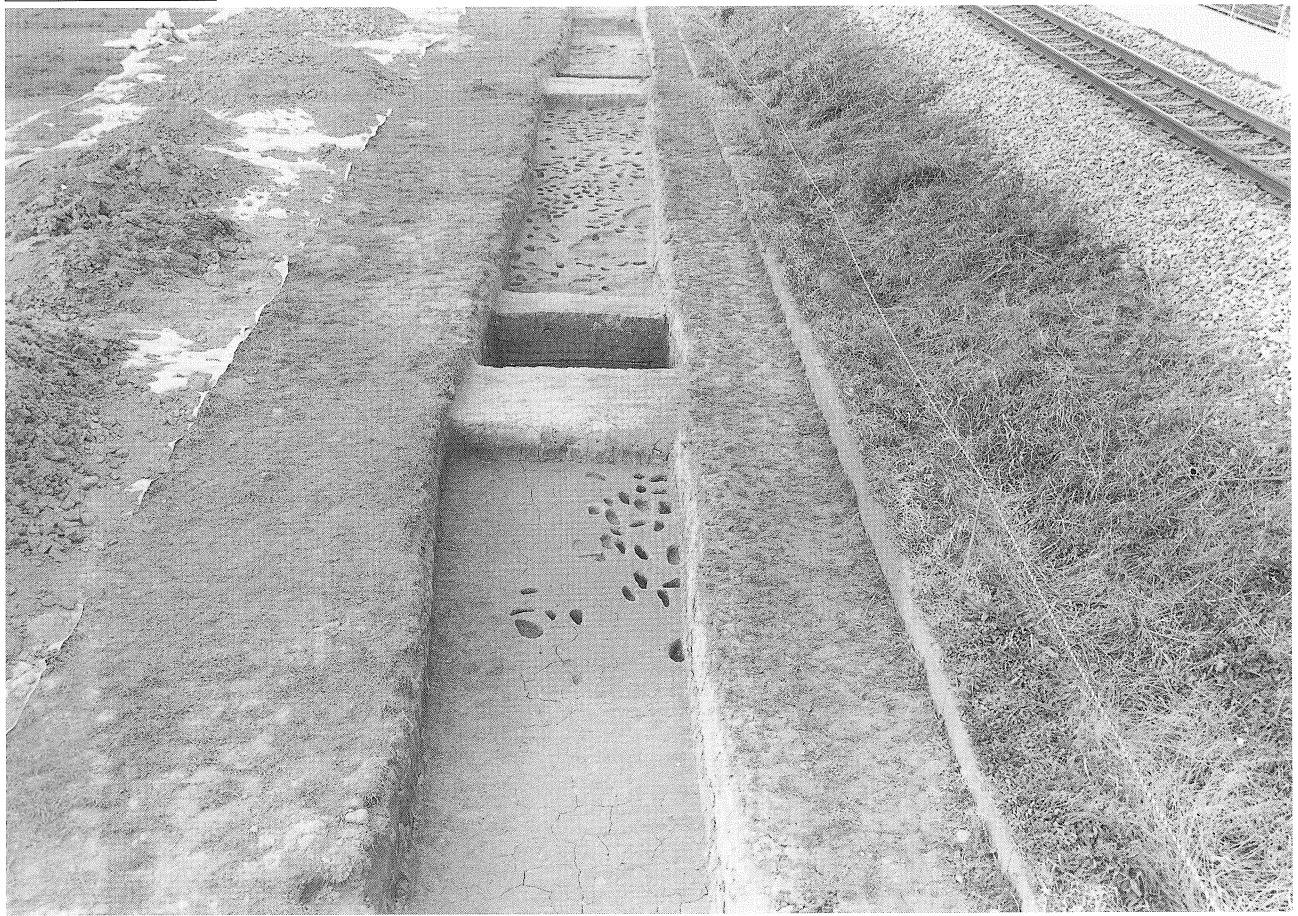
b 2 調査区全景 (西から)



a 3調査区全景（南から）



b 3-A調査区全景（南から）



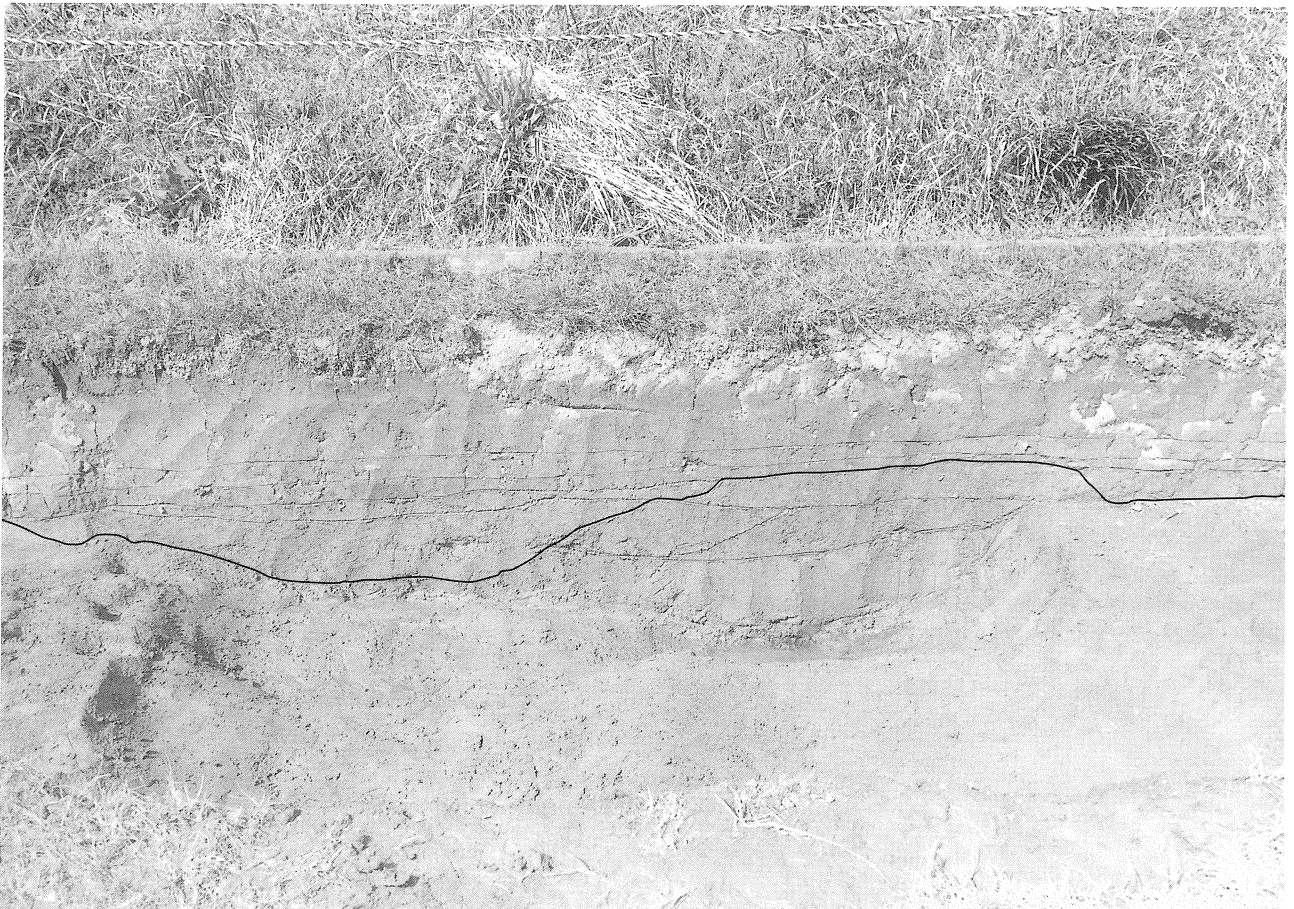
a 3-A 調査区奈良時代遺構全景 (東から)



b 3-A 調査区奈良時代遺構近景 (東から)



a 3-A調査区土層（東から）



b 3-A調査区条里遺構土層（南から）

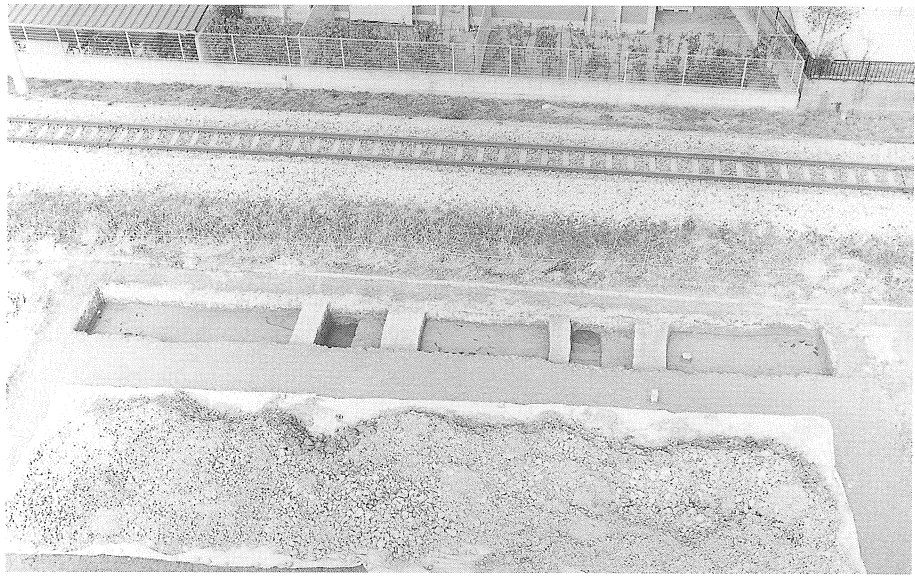
図版 6



a 3-A調査区古墳時代遺構全景（東から）



b 3-A調査区古墳時代遺構近景（東から）



a 3-B調査区全景（南から）



b 3-B調査区奈良時代遺構近景（西から）

図版 8



a 3-B調査区土層（東から）



b 3-B調査区弥生時代土器群出土状況（西から）



a 3-C調査区全景 (南から)



b 3-C調査区全景 (東から)



a 3-C調査区奈良時代遺構近景（東から）



b 3-C調査区土層（西から）

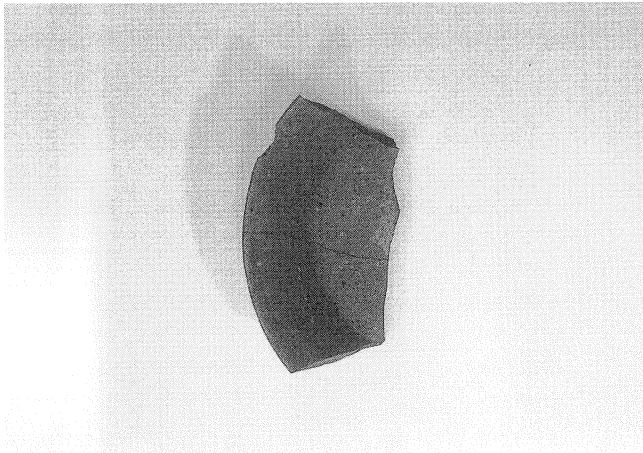
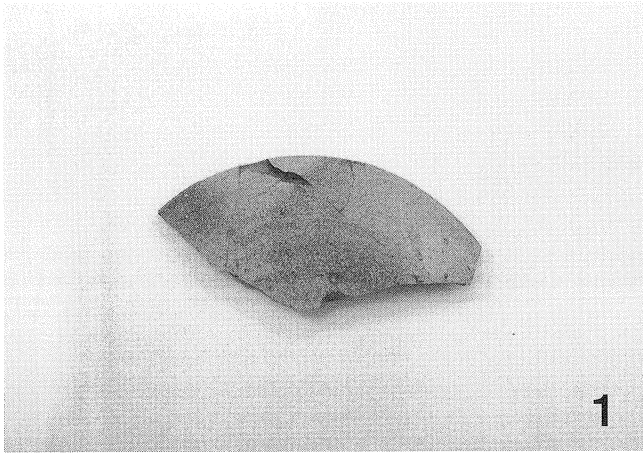


a 3-D調査区全景（南から）

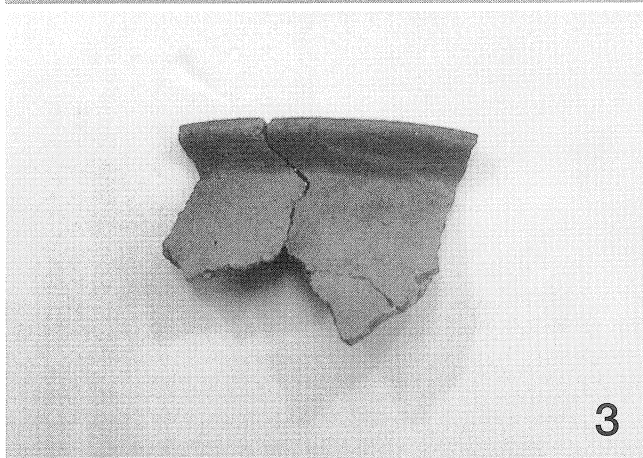
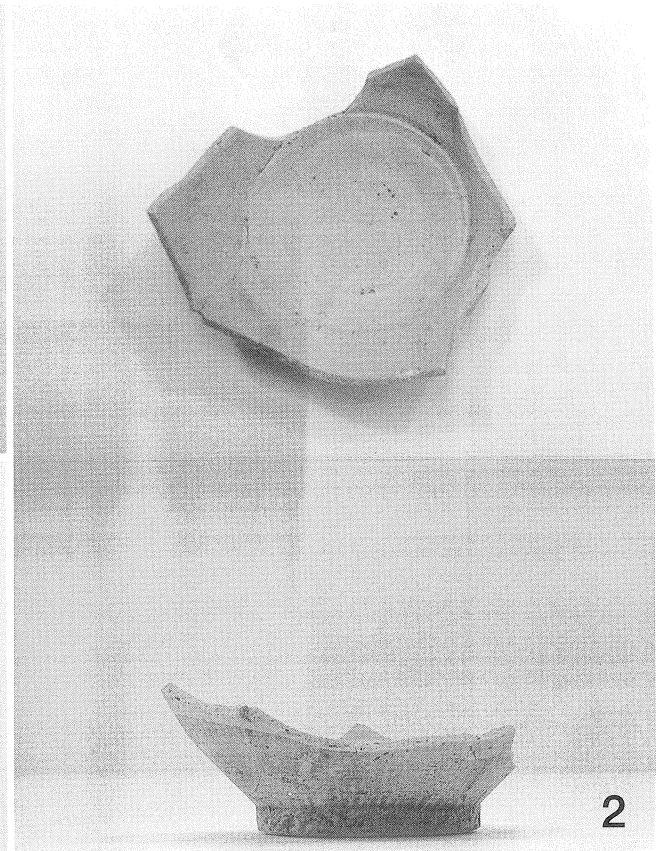
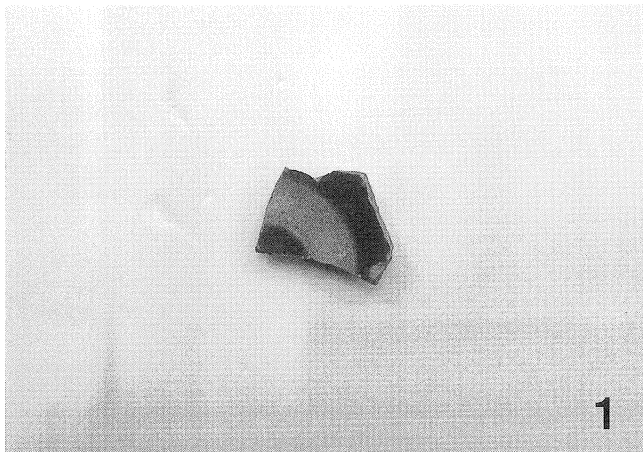


b 3-D調査区全景（西から）

図版 12



a 3-A 調査区出土遺物



b 3-B 調査区出土遺物

2. 平成9年度発掘調査

1) はじめに

平成9年度は前原市大字浦志・波多江・高田地区のJR筑肥線複線化用地の発掘調査を実施した。調査は3調査区にわけて実施した。以下各調査区について調査内容を報告する。

2) 調査内容

1 調査区

1調査区は平成9年度調査区で最も西に位置する。現況は荒地・水田である。調査区全体は南北方向に約2m、東西方向に約218mからなる長方形であり、面積は約436m²になる。1調査区は4調査区にわけて調査を行った。

1-A 調査区

本調査区は1調査区のなかでも東端に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約70mからなる長方形であり、面積は約140m²を測る。現況は水田である。土層観察の結果、本調査区は元来微高地であったものの、後世の攪乱を受け遺構面はほとんど残っていなかった。

遺物は包含層から陶磁器、須恵器片が若干出土したが図示し得なかった。

1-B 調査区

本調査区は1-A調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約70mからなる長方形であり、面積は約140m²を測る。現況は水田である。土層観察の結果、本調査区は1-A調査区(微高地)に隣接する低湿地帯であったことが想定され、複数の層に水田と想定される粘土質の層を確認している。しかし、時期を想定できる遺物が出土していないためにそれぞれの時期については不明である。

遺物は陶磁器・須恵器片等が出土したが図示し得なかった。

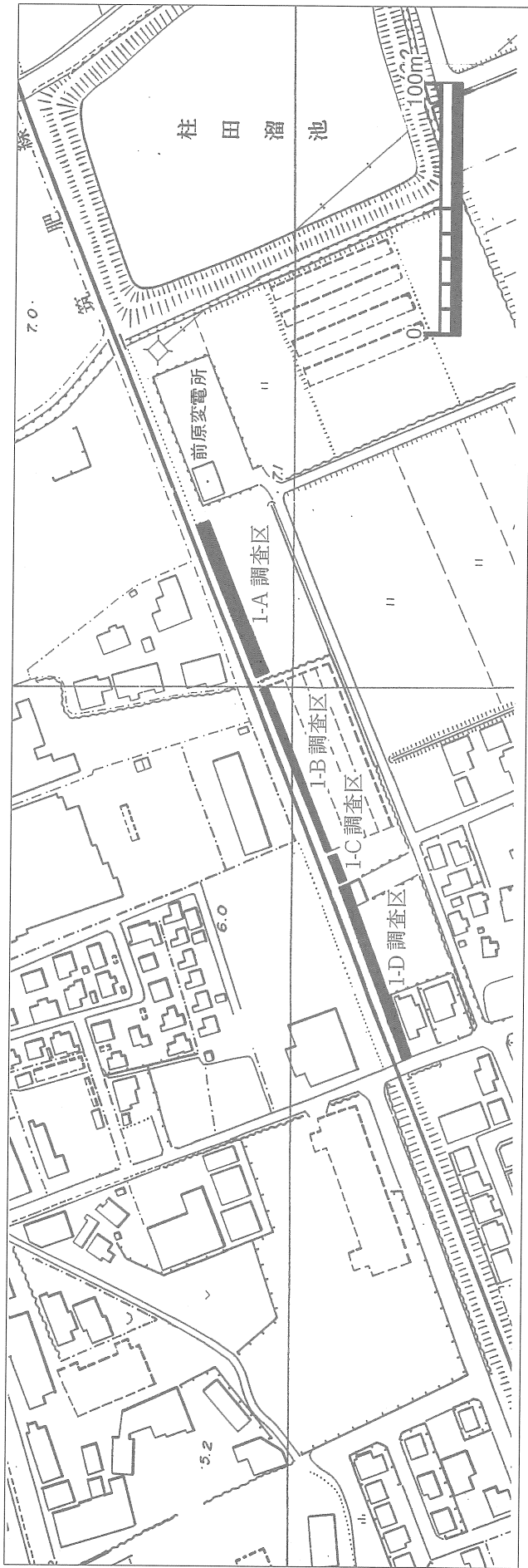
1-C 調査区

本調査区は1-B調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約18mからなる長方形であり、面積は約36m²を測る。現況は水田である。遺構は後世の攪乱をうけていたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては層位的に上から中世耕作層・弥生時代耕作層が確認できた。また、中世耕作層・弥生時代耕作層においては人の足跡も検出されている。

遺物は陶磁器・弥生式土器片が出土したが図示し得なかった。

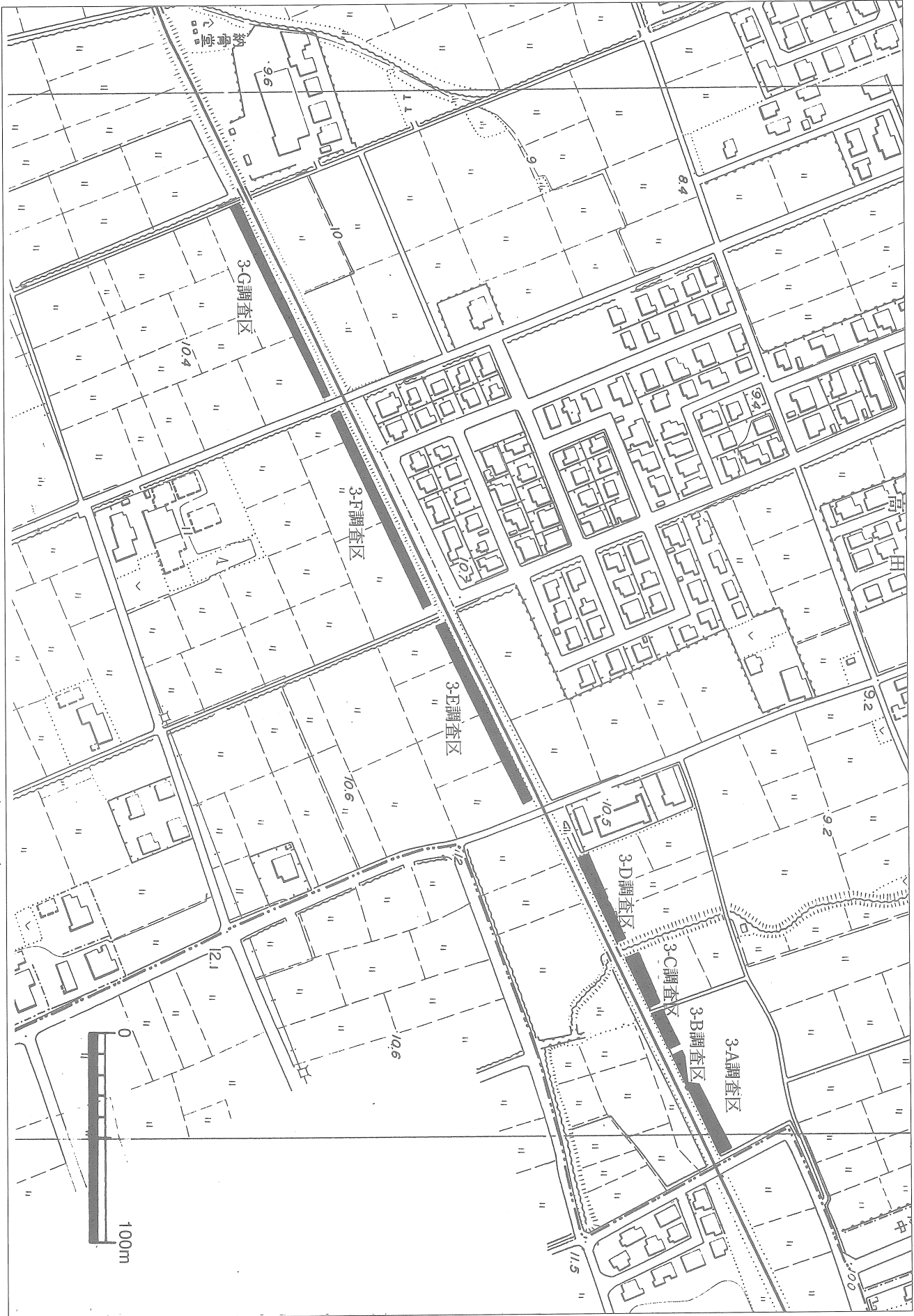
1-D 調査区

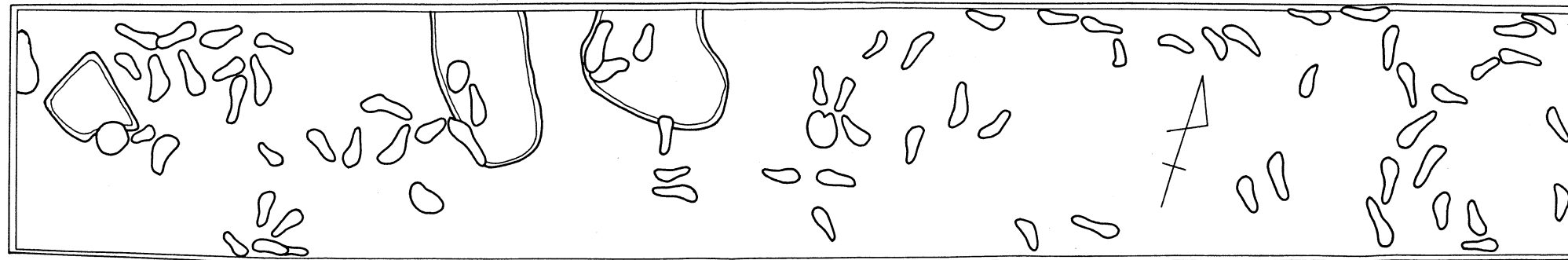
本調査区は1調査区のなかでも最西端に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約60mからなる長方形であり、面積は約120m²を測る。現況は水田である。遺構は後世の攪乱をうけて



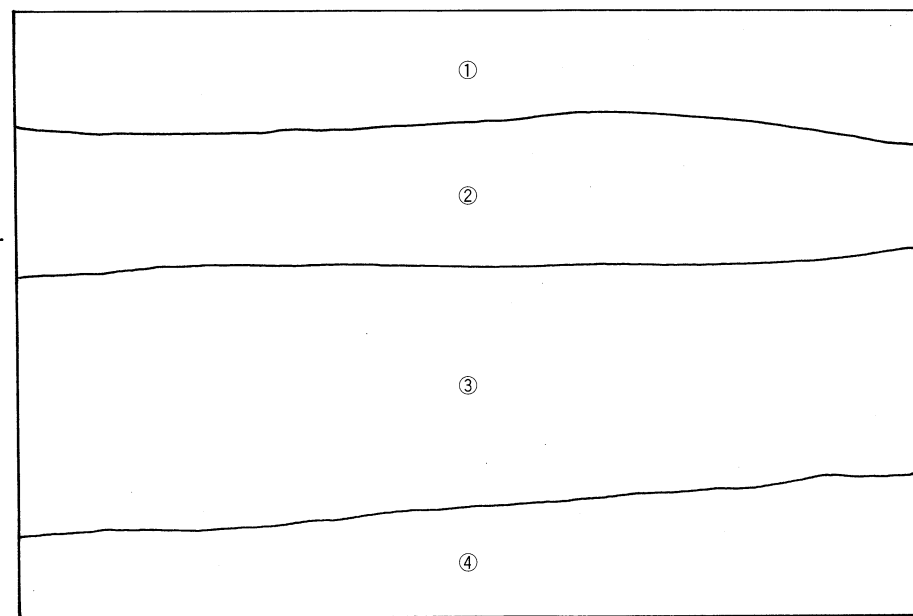
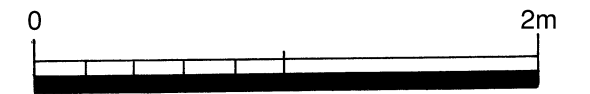
第8図 平成9年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)

第9図 平成9年度調査地点周辺の地形 (1/2,500)





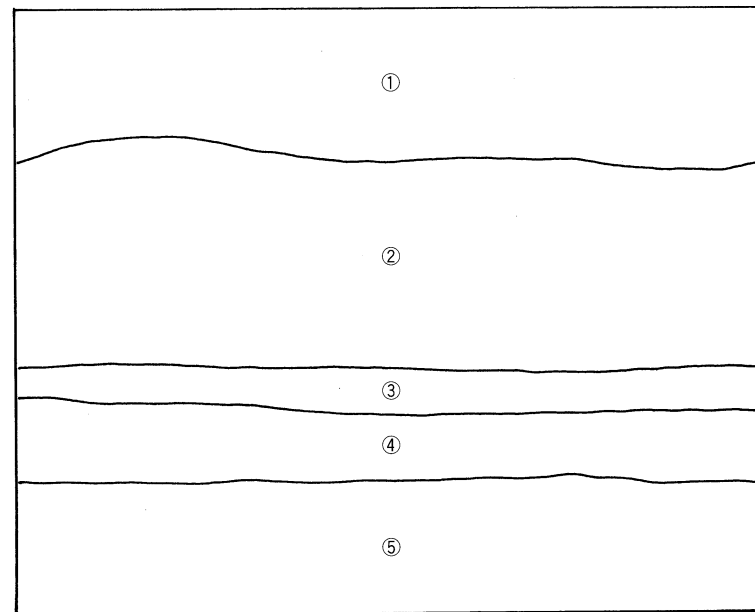
1-C調査区遺構実測図（中世）



- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③黄色褐色土
- ④砂レキ層

1-A調査区土層実測図（1/10）

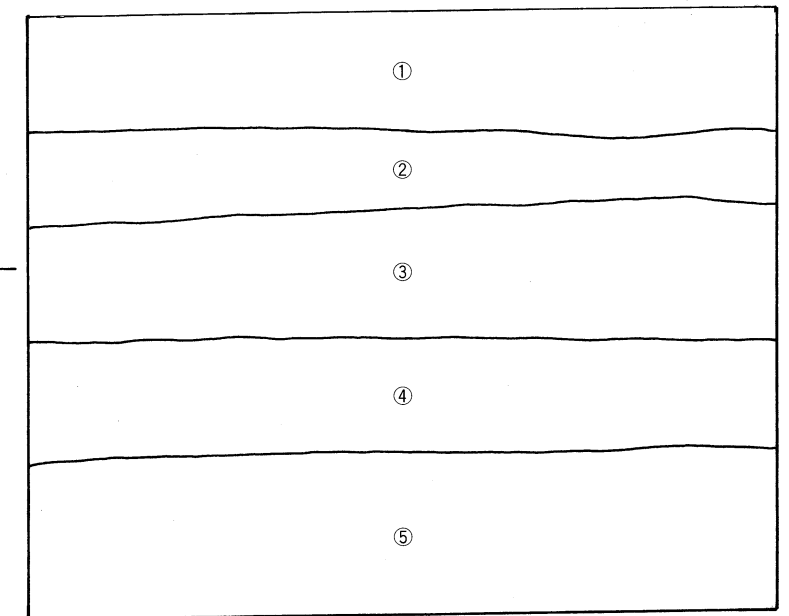
△H=6.00m



- ①現代耕作土
- ②現代床土
- ③黒褐色粘質土
- ④淡黒褐色粘質土
- ⑤③と同じ

1-B調査区土層実測図（1/10）

△H=6.50m



- ①現代耕作土
- ②暗黒灰色褐色土
- ③淡黒灰色土（中世足跡検出）
- ④②と同じ（弥生時代足跡検出）
- ⑤砂質土

1-C調査区土層実測図（1/10）

△H=5.50m

3. 1-C調査区遺構実測図及び1調査区土層実測図



いたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては層位的に上から中世耕作層・弥生時代耕作層等を確認できた。土層観察の結果、弥生時代において本調査区の西側が低丘陵であり、その低丘陵に沿うようにして水田が営まれていたことがわかった。奈良～平安時代は不明ではあるものの、中世になると一斉に開発が進められ、当該地一帯において水田が営まれていたようである。

出土遺物（第10図 図版25-a）

遺物は陶磁器・土師皿・弥生式土器片が出土した

出土遺物

1-D 調査区出土遺物（第10図 図版25-a）

1は第3層（淡白灰色粘質土）から出土した。2は第6層（暗黒灰色粘質土）から出土した。1は土師皿である。復元口径9.6cm、器高1.6cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成はあまりよくない。内面から外面の体部にかけて風化のため調整は観察できなかったが、底部は糸切り底で板状圧痕はない。内・外面ともに淡茶褐色を呈する。2は弥生式土器で調査区東側の低丘陵部のピットのなかから出土した。甕形土器の口縁部である。胎土は1mm前後の白色砂粒を多く含み、焼成はあまりよくない。内・外面ともに風化が著しく、調整は観察できなかった。内・外面ともに暗茶褐色を呈する。

2 調査区

2 調査区はJR波多江駅の西約100mに位置する。現況は水田である。調査区全体は南北方向に約2m、東西方向に約70mからなる長方形であり、面積は約140m²になる。調査は2 調査区にわけて調査を実施した。

2-A 調査区

本調査区は2 調査区の東端に位置する。土層観察の結果、元来、本調査区は微高地であり、遺構としては溝・ピット群等を検出しているが、後世の水田造成のためその他の遺構は残存していなかった。

遺物は後世の水田造成が著しく、陶磁器・須恵器・土師器の破片がわずかに出土したにすぎず、遺構の時期は不明である。



第10図 1-D 調査区出土遺物実測図（1/2）

2-B 調査区

本調査区は2-A調査区の西側に位置する。本調査区は2-A調査区に隣接する低湿地帯と想定される。遺構としては人の足跡・ピット群等を検出したが、後世の水田造成のためその他の遺構は残存していなかった。土層観察の結果、複数の層に水田と想定される粘土質の層を確認している。しかし、時期を想定できる遺物が出土していないためにそれぞれの時期については不明である。

遺物は陶磁器等が出土したが図示し得なかった。

3 調査区

3調査区は前原市と福岡市とが接する市境に位置する。調査区全体は南北方向に約2m、東西方向に約350mからなる長方形であり面積は約700m²になる。現況は水田である。3調査区は7調査区にわけて調査を行った。

3-A 調査区

本調査区は3調査区の東端に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約50mからなる長方形であり面積は約100m²になる。現況は水田である。遺構は後世に水田造成が成されたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては層位的に上から中世耕作層・奈良時代～平安時代にかけての耕作層・弥生時代耕作層の粘土層と砂礫層（洪水の跡）が確認できた。その弥生時代耕作層からは人の足跡・畦畔・溝等が検出された。特に、畦畔の両端は木杭と板によって補強されており、当時の技術を知る上で貴重な資料となる。なお、本調査区の両側は微高地であることから、当該地は微高地間に所在する低湿地であったと想定される。

出土遺物（第12～15図 図版25-b、26、27、28）

遺物は陶磁器・土師皿・弥生式土器が出土した

3-B 調査区

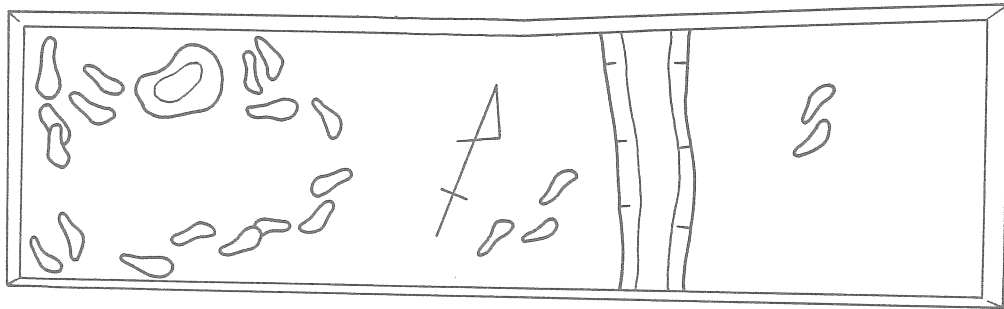
本調査区は3-A調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約20mからなる長方形であり面積は約40m²になる。現況は水田である。後世の水田造成ため削平を受けており、遺構は確認できなかった。元来、当該地は微高地であったようで3-A調査区はそれに隣接する低湿地帯であったことが想定される。

遺物は陶磁器・弥生式土器片等が出土したが図示し得なかった。

3-C 調査区

本調査区は3-B調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約30mからなる長方形であり面積は約60m²になる。現況は水田である。遺構は後世に水田造成が成されたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては弥生時代耕作層と想定される粘土層と砂礫層（洪水の跡）が確認できた。また、弥生時代耕作層から人の足跡・溝等が検出された。本調査区は3-B調査区（微高地）に隣接する低湿地帯であったことが想定される。

遺物は陶磁器・弥生式土器片等が出土したが図示し得なかった。



第11図 3-E 調査区縄文時代遺構実測図 (1/30)

3-D 調査区

本調査区は3-C調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約45mからなる長方形であり面積は約90m²になる。現況は水田である。土層観察の結果、複数の層に水田と想定される粘土質の層を確認している。しかし、時期を想定できる遺物が出土していないためにそれぞれの時期については不明である。

遺物は陶磁器・弥生式土器片等が出土したが図示し得なかった。

3-E 調査区

本調査区は3-D調査区の西側に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約200mからなる長方形であり面積は約400m²になる。現況は水田である。遺構は後世に水田造成が成されたにもかかわらず、比較的によく残っていた。遺構としては縄文時代晩期の黒灰色の粘土層・砂礫層(洪水の跡)を確認できた。また、その縄文時代晩期の黒灰色の粘土層から人の足跡を検出している。

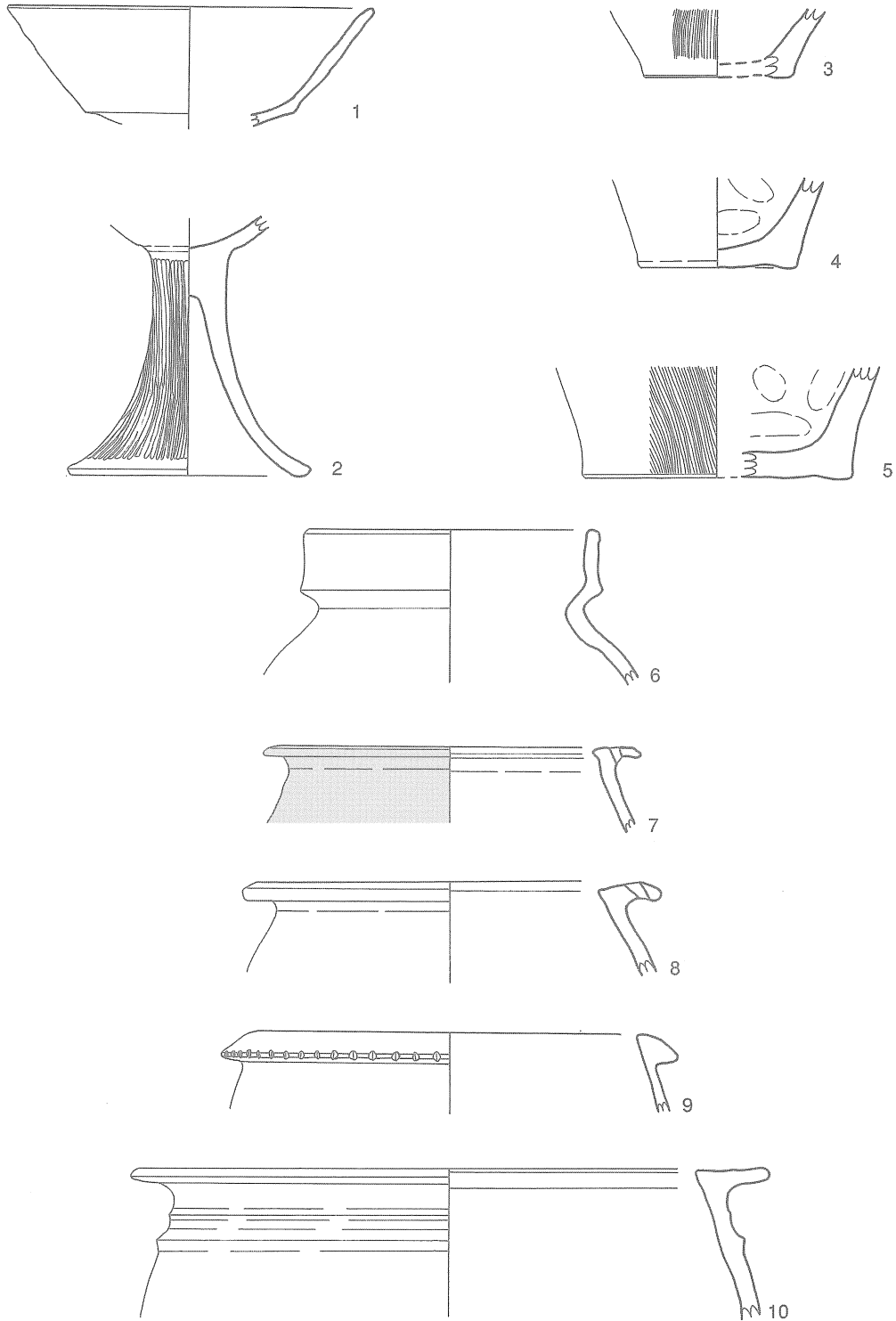
遺物は陶磁器・須恵器・土師器の破片・弥生式土器・縄文式土器・石器等が出土しているが図示し得なかった。

3-F 調査区

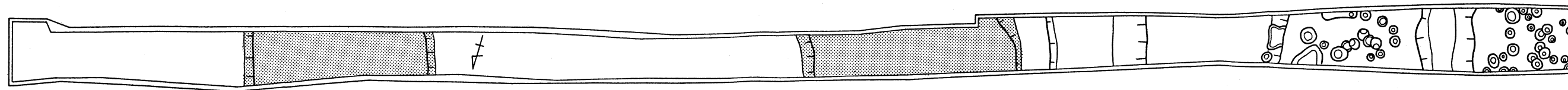
本調査区は3-E調査区の西側に位置する。試掘の結果、多数のピット群が確認された。このことから本調査区は元来、微高地であったことが想定され、同時に3-E調査区は本調査区(微高地)に隣接する低湿地帯であったことも想定される。なお、遺跡の規模及び調査期間等を考慮して、本調査区の調査は平成10年度に実施するように計画変更された。

3-G 調査区

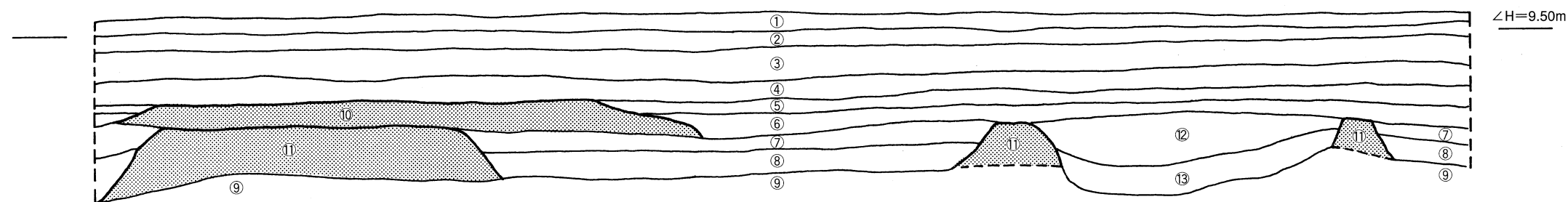
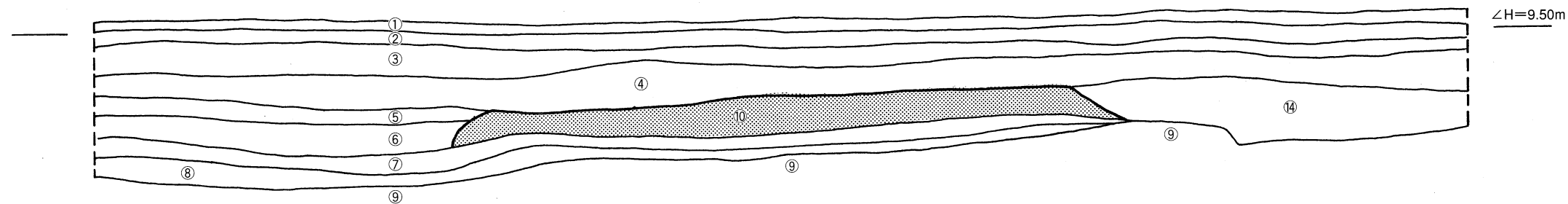
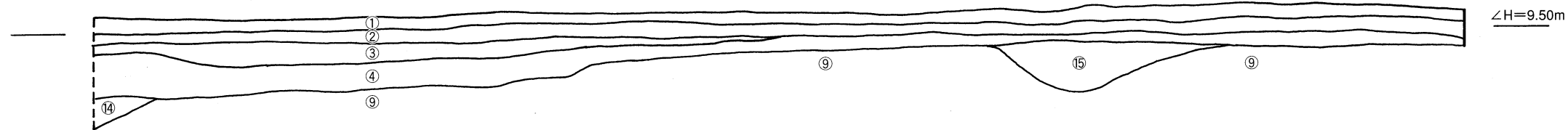
本調査区は3調査区で最も西端に位置する。調査区は南北方向に約2m、東西方向に約100mからなる長方形であり面積は約200m²になる。現況は水田である。土層観察の結果、本調査区は3-F調査区に続く微高地であることがわかった。ただし、後世の水田開発のため遺構面はかなり削平されていた。



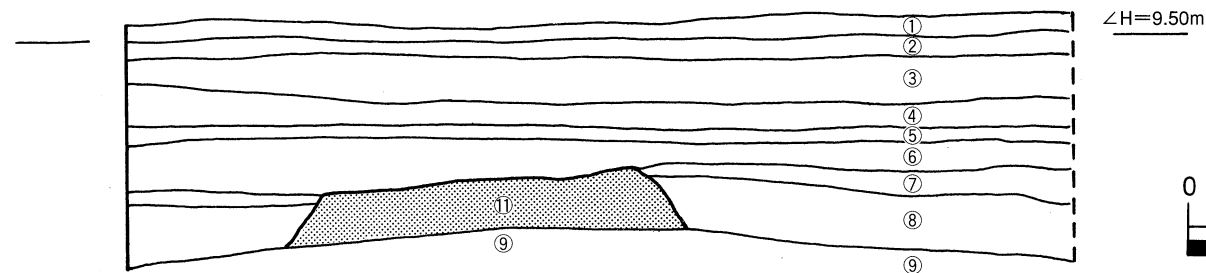
第12图 3-A 調査区⑥層出土遺物実測図 (1/3)



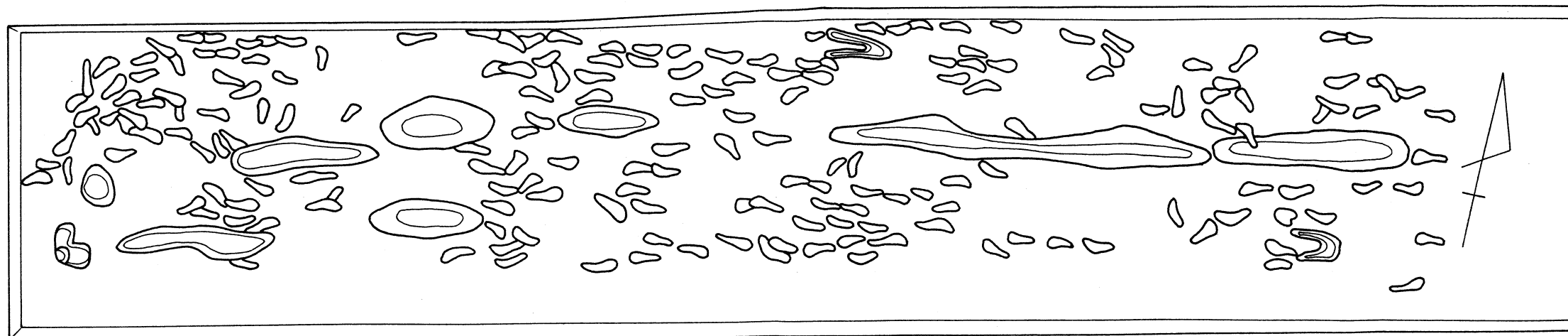
3-A 調査区遺構実測図



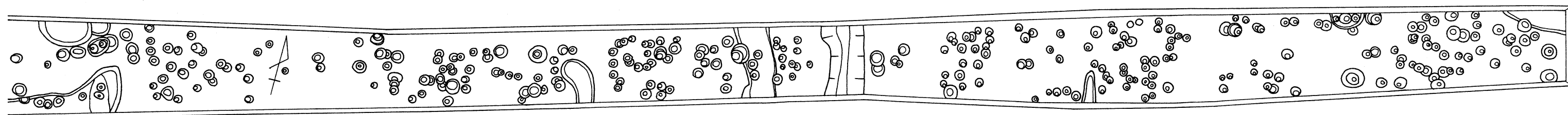
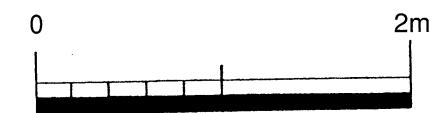
- | | |
|-----------|-------------------------|
| ①現代耕作土 | ⑨青灰色粘質土 |
| ②現代床土 | ⑩⑥と同じであるが⑥よりしめ固めてある（畦畔） |
| ③黒色粘質土 | ⑪⑥と同じであるが⑥よりしめ固めてある（畦畔） |
| ④黒灰色粘質土 | ⑫⑦と同じ |
| ⑤④に多く砂を含む | ⑬⑥と同じ |
| ⑥暗黒灰色粘質土 | ⑭淡黒灰色粘質土 |
| ⑦砂レキ層 | ⑮⑭と同じ |
| ⑧⑥と同じ | |



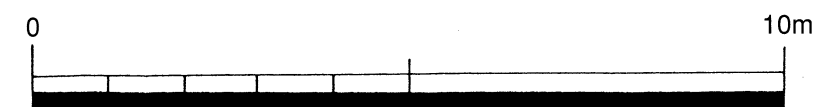
4. 3-A 調査区南側土層実測図



3-F 調査区遺構実測図 (中世)



3-F 調査区遺構実測図 (古墳時代)



5. 3-F 調査区遺構実測図

なお、遺物は出土していない。

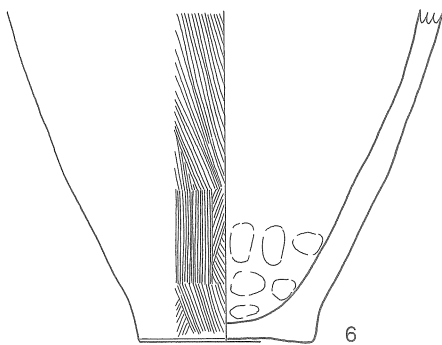
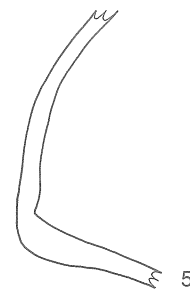
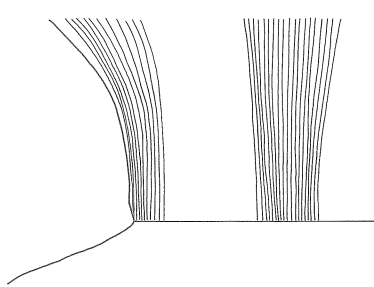
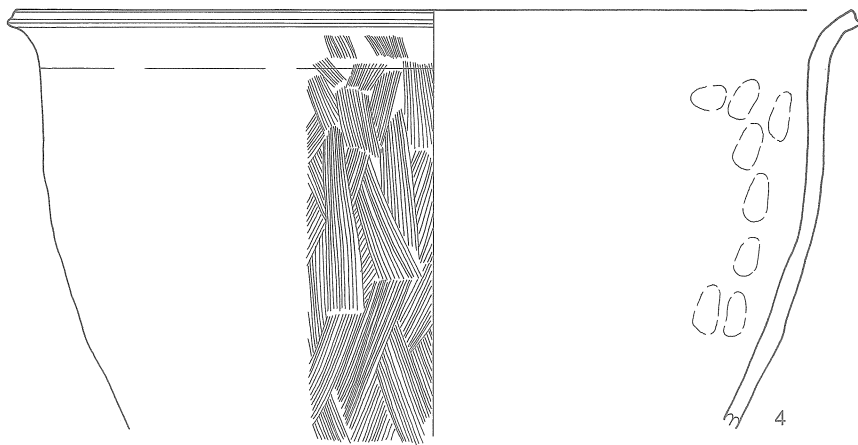
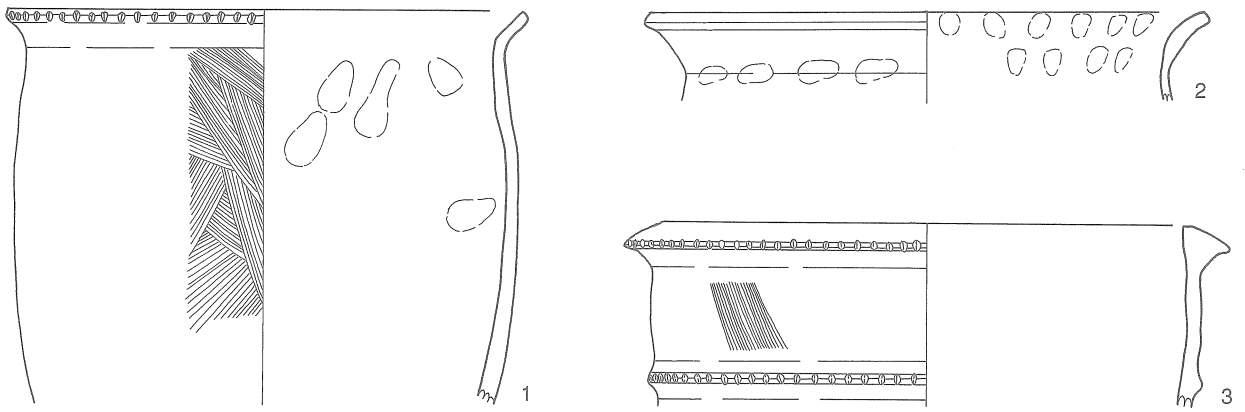
出土土器

3-A 調査区⑥層出土遺物 (第12図 図版25-b)

1～10は3-A 調査区の⑥層から出土した遺物である。1は土師器の高坏の坏部で、脚部を欠損する。坏部の復元口径16cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。2は土師器の高坏の脚部で坏部を欠損する。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面が淡黒褐色、外面が黒褐色を呈する。調整は内面に脚端部から基部にかけてナデ、外面に基部から脚端部にかけて縦方向のヘラ磨き、脚端部は丁寧なナデが施されている。3～5は甕形土器の底部である。3の復元低径は6.6cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。内面は指で調整後にナデが施されているが、一部に指頭痕が残っている。外面は刷毛目調整が施されている。4の復元低径は7cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。内面は指で調整後にナデが施されているが、一部に指頭痕が残っている。外面は刷毛目調整が施されている。5の復元低径は12cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。内面は指で調整後にナデが施されているが、一部に指頭痕が残っている。外面は刷毛目調整が施されている。6～10は甕形土器の口縁部である。6は土師器である。復元口径は12cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。7の復元口径は12.4cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。7は外面に朱が施されている。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。7の口縁部には穴が穿ってある。8の復元口径は13cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。9の復元口径は16.4cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。口縁部に刻み目が施されている。10の復元口径は21.8cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。

3-A 調査区⑦層出土遺物 (第13図 図版26)

1～7は3-A 調査区の⑦層から出土した遺物である。1は甕形土器である。底部を欠損する。復元口径20.4cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに褐色を呈する。調整は体部の内面にナデが施されているが、一部に指頭痕が残っている。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。外面には刷毛目調整が施されている。2は甕形土器の口縁部である。復元口径22cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は体部の内面にナデが施されているが、一部に指頭痕が残っている。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。外面も指で調整後、ナデが施されている。3

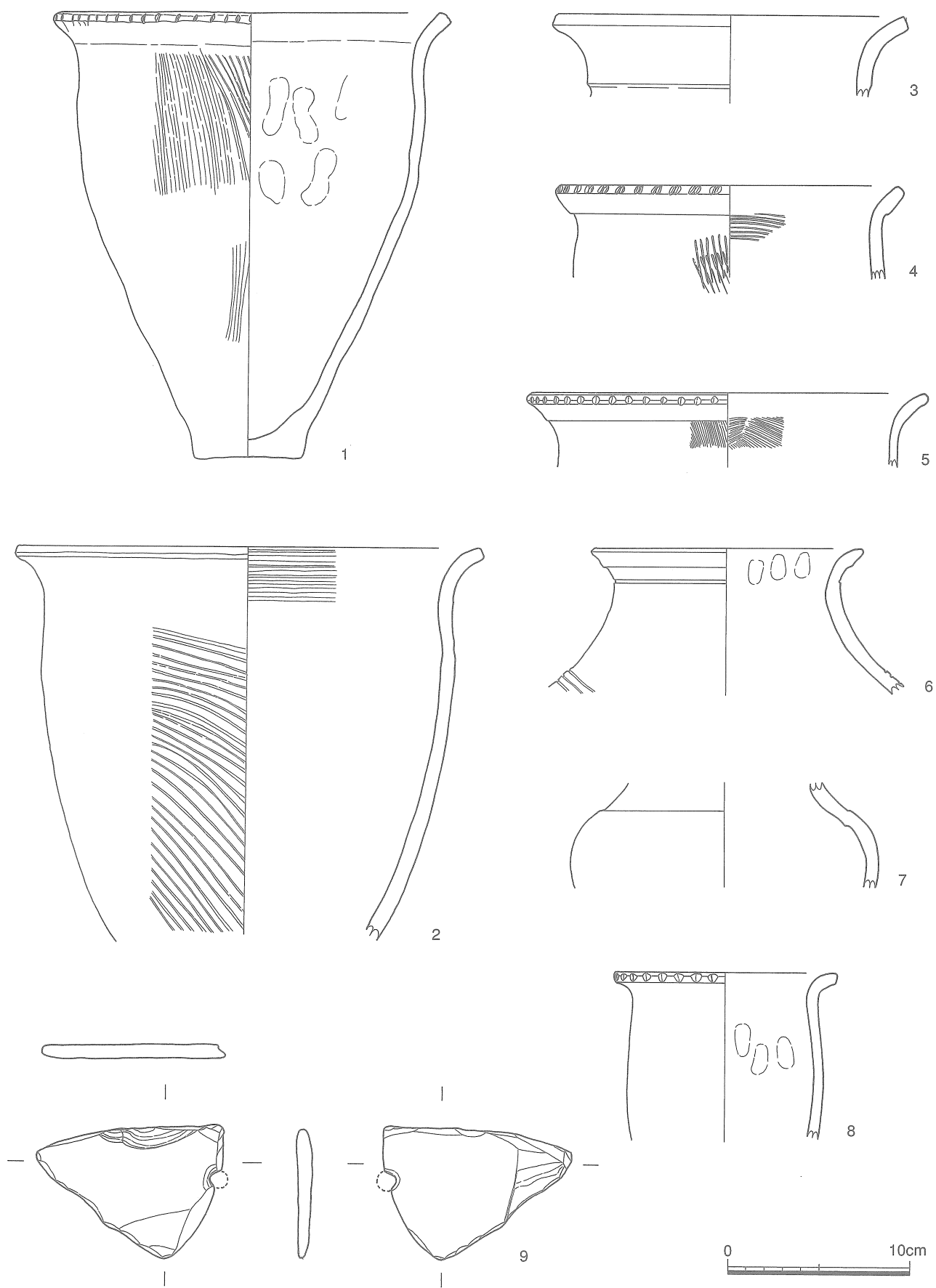


第13図 3-A 調査区⑦層出土遺物実測図 (1/3、7のみ 1/2)

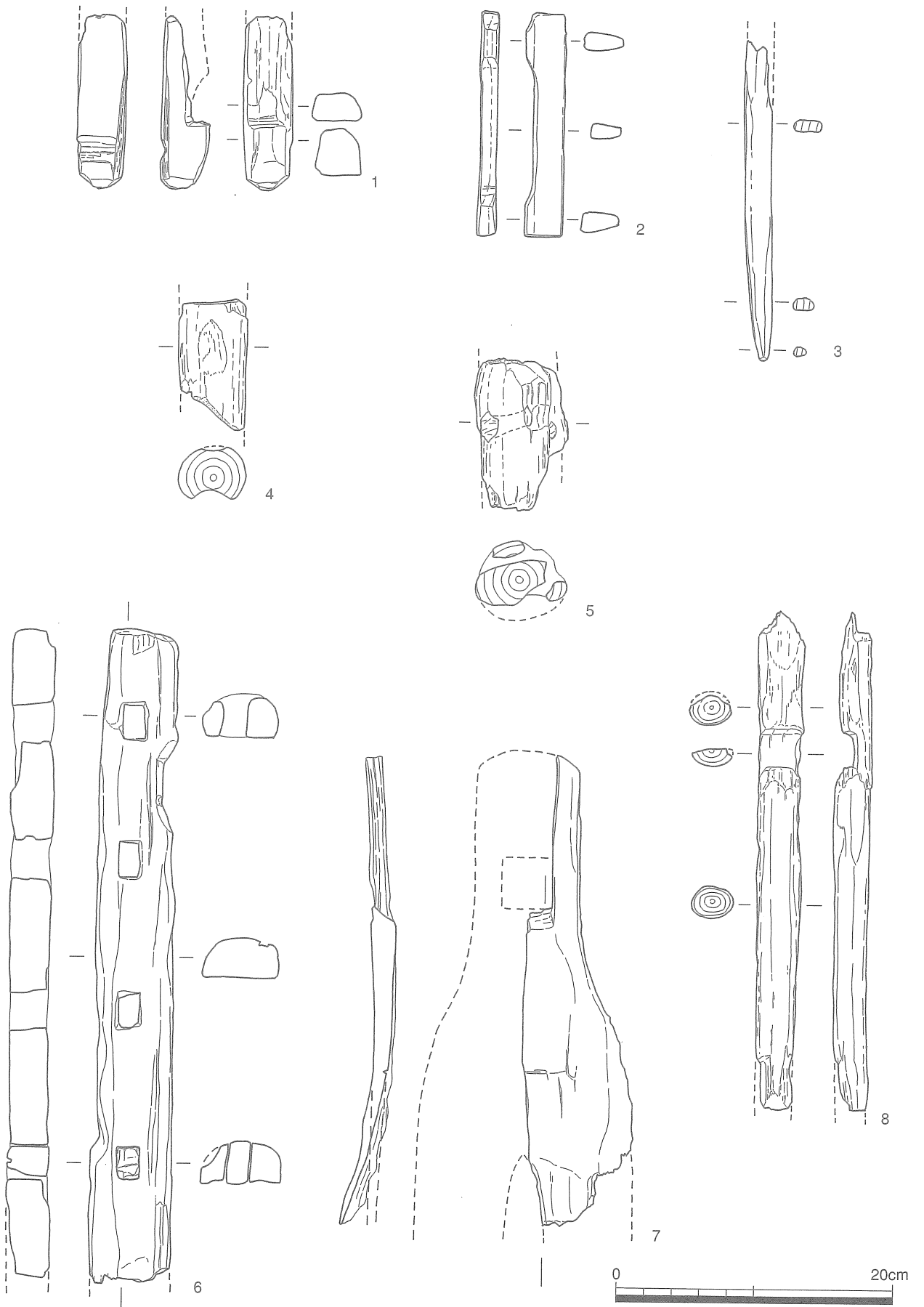
は甕形土器の口縁部である。口縁部と体部に刻目突帯をめぐらす。復元口径10.4cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。調整は体部の内面にナデが施されている。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。外面は口縁部と体部の刻目突帯の間に刷毛目調整が施されている。4は甕形土器である。底部を欠損する。復元口径33cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに淡茶褐色を呈する。体部の内面は指で調整後、ナデが施されている。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。外面は刷毛目調整が施されている。5は壺形土器である。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。朱が施してあったのか内面、外面ともに明赤茶色を呈する。内面はヘラ削りの後、ナデが施されている。体部外面は丁寧なナデが施されている。体部から口縁部にかけての外面は丁寧なナデが施され、さらにヘラ磨きで形成する幅約5cmの暗文が縦方向に施されている。6は甕形土器の底部である。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。体部内面はナデが施され、底部には指頭痕が残る。体部外面は刷毛目調整が施されている。7は壺形土器の胴部である。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。体部内面は丁寧なナデが施されている。体部外面は1.5cm間隔で沈線があり、その沈線間には貝殻状の工具で文様が施されている。

3-A 調査区⑧層出土遺物 (第14図 図版27)

1は甕形土器である。口径20.4cm、胴径18cm、底径6cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに淡褐色を呈する。口縁部には刻目突帯がめぐる。体部内面は指で調整後、ナデが施されている。口縁部は丁寧なナデが施されている。体部外面は刷毛目調整が施されている。2は甕形土器である。底部を欠損する。口径25cm、胴径23cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに淡褐色を呈する。体部内面は縦方向にナデが施されている。口縁部内面は横方向の刷毛目調整が施されている。口縁部外面は丁寧なナデが施されている。体部外面は頸部に縦方向のナデ、胴部は左上から右下方向へ刷毛目調整が施されている。3は壺形土器の口縁部である。復元口径19cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに淡褐色を呈する。調整は内面、外面ともに丁寧なナデが施されている。4は甕形土器の口縁部である。復元口径18.5cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。口縁端部に刻み目が施されている。体部内面はナデ、口縁部にかけては横方向に刷毛目調整が施されている。口縁部は丁寧なナデが施されている。体部外面は刷毛目調整が施されている。5は甕形土器の口縁部である。復元口径21.2cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。体部内面は丁寧なナデ、頸部内面は刷毛目調整が施されている。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。体部外面は縦方向に刷毛目調整が施されている。6は壺形土器の口縁部と胴部の一部である。復元口径14.2cmを測る。胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに黒褐色を呈する。体部内面は丁寧なナデが施されている。口縁部内面は指で調整後、丁寧にナデであるが一部に指頭痕を残す。口縁部外面は丁寧なナデが施され、頸部外面には沈線が施されている。胴部外面には沈線による文様がある。全体的に丁寧なつくりとなっている。7は壺形土器の頸部と胴部の一部である。復元胴径約16cmを測る。



第14图 3-A 調査区⑧層出土遺物実測図 (1/3)



第15図 3-A 調査区出土木製品実測図 (1/4)

胎土は1mm以下の白色砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内面、外面ともに淡褐色を呈する。内面は丁寧なナデ、外面はヘラ磨きが施されている。全体的に丁寧なつくりとなっている。8は甕形土器である。底部を欠損する。復元口径は約12cm、胴径約10.5cmを測る。口縁端部には刻み目が施されている。胴部内面は指で調整後、ナデである。一部に指頭痕が残る。口縁部は丁寧なヨコナデが施されている。口縁部から胴部外面にかけては丁寧なヨコナデが施されている。9は石包丁である。厚さ約7mmを測る。石材は砂質の堆積岩である。この石包丁は製作途中に失敗して破棄されたのか、もしくは制作途中で割れたものを再利用して製作されたものかは不明である。

3-A 調査区出土木製品 (第15図 図版28)

1～8は3-A調査区の⑥層より出土した木製品である。1は水田面から出土した。鍬の柄である。断面は蒲鋒形を呈する。剥離が著しく、残存状況はあまり良くない。2は水田面から出土した。用途不明品である。断面は隅丸方形を呈する。3は水田面から出土した。又鍬の刃部の一部である。先端部は楕円形、上部は隅丸方形の断面を呈する。全体に焼け焦げている。4は畦畔の端部から出土した。畦畔の端部を補強するために使用された杭である。断面は円形を呈し、直径約5cmを測る。樹種同定(平成10年度自然科学分析)の結果、材質はコナラ属アカガシ亜属の樹木と判明している。5は畦畔の端部から出土した。畦畔の端部を補強するために使用された杭である。断面は円形を呈し、直径約7cmを測る。樹種同定(平成10年度自然科学分析)の結果、材質はコナラ属アカガシ亜属の樹木と判明している。6は水田面から出土した。断面は蒲鋒形を呈する。本体中央部に7cm間隔で1cm×1.4cmの方形の穴が穿たれている。その方形の穴の一部に他の部材が残存していることから、6はある木製品の部材であったことがわかる。形状から田下駄の一部であったと想定される。7は水田面から出土した。二又鍬の歯の一部である。遺物上部には1.8cm×1.8cmの柄壺の位置を推定できる方形の穴の一部を確認できる。厚さは約2cmを測る。8は水田面から出土した。鍬の柄の一部と想定される。断面は円形を呈し、直径約3cmを測る。遺物の一部に1.4cm×2.4cmを測る方形の臍が穿がたれている。

なお、紙面の制約のため記載できなかったが、上記のほかに畦畔の端部から出土した杭2点、水田面から出土した板状木製品2点の樹種同定(平成10年度自然科学分析)を依頼している。その結果、畦畔の端部から出土した杭2点の材質はともにヤナギ属の樹木であり、水田面から出土した板状木製品2点のうち1点の材質はクスノキ科の樹木、残りの1点の材質はスギであったことがわかっている。

3-A調査区から出土した木製品の一部ではあるものの、同定された樹種は、ヤナギ属、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ科、スギであったことが判明した。ヤナギ属は河辺などの低湿なところに生育し、スギは温帯域に広く分布する。コナラ属アカガシ亜属やクスノキ科は照葉樹林の主要構成要素である。いずれの樹種も、遺跡の周辺地域で容易に入手でき、それらを木製品に加工したことが想定できる。